

## 令和5年度2回大槌町総合教育会議 議事録

### 1 日時

令和5年11月21日(火)午後1時～午後3時

### 2 場所

大槌町役場 3階 大会議室

### 3 出席者

平野 公三 町長

松橋 文明 教育長

大萱生 都 教育委員

谷藤 怜美 教育委員

東梅 広美 教育委員

芳賀 新 教育委員

NPO 法人カタリバオンライン事業部長 瀬川 知孝様(有識者)

東京大学医学部付属病院心の発達診療部 医師 佐藤 駿一様(有識者)

菊池 学 副町長(オブザーバー)

文部科学省初等中等教育局初等中等教育企画課課長補佐 筒井 諒太郎様(事業委託者)

文部科学省初等中等教育局初等中等教育企画課専門職 松田 大輝様(事業委託者)

### [事務局]

藤原総務課長、太田企画財政課長、小國健康福祉課長、岩間主幹(総務課)、関谷総務班長  
学務課:吉田課長、平野大槌型教育推進班長、菅野統括教育専門官、佐藤主任指導主事、  
小原指導主事、南スクールソーシャルワーカー、大森相談員

## 【議事詳細】

### 1 開会(藤原総務課長)

### 2 挨拶(平野町長)

※挨拶内容は省略

### 3 協議

#### (1)「けやき共育」推進状況

- ①第1回の提言から
- ②先進地視察報告
- ③今年度の「けやき共育」取組状況
- ④児童・生徒の状況
- ⑤3月までの推進計画(来年度構想含む)

## 《質疑応答》

### ① 第1回の提言からについて

なし

### ② 先進地視察報告について

#### 【大萱生委員】

この行程を多分2日か1日半の中で一生懸命回られて本当にいい視察が出来たことと思います。やはり今後目指す方向性を考える上でも、これからも、もう少し先生方に参加していただきながらぜひ継続していただき、また、大槌町でも不登校の生徒も出ているし、問題点も出てくると思いますので、今後とも今回視察した学校とも連携を持ちながら関わっていただくことが大事ではないのかなと思います。それを、現場の中で職員間でも共有してほしい。

ぜひ視察は、今後も継続していただきたいと思います。

#### 【町長】

今の研修は継続という形でしょうか。事務局何かありますか。

#### 【事務局回答】

本当に、視察というのは新たな視点や自分達が行き組んでいたものに対し、また更に考えるすごく良い機会だなと思っています。また、ぜひお願いしながら研修等を続けていきたいと考えております。

#### 【町長】

大槌学園2名と吉里吉里学園小学部1名、中学部1名の先生方の参加だったようですが、予算の関係だったとは思いますが、多くの先生方に参加してもらいたいと思いますが、今後の予算措置の考え方はどのようになっていますか。

#### 【事務局】

今回は、予算が決められており、急な事業でしたので、このようなメンバー構成になりました。ですが、大槌の教育推進協による先生方の研修を進めているところです。不登校に特化したものではございませんが、先生方に研修の場、視察の場を提供する方向で現在進めております。1月～2月にかけて今年度実施する予定です。

【町長】

今回の研修の一番近い、狙おうという企画はどこだったのですか。多くの学校を視察研修していますが、全て吸収できる良い点があったと思われませんが、今大槌が求めて、目指そうと思われた視察先は具体的にありましたか。

【事務局回答】

まだ絞り切れてないのが実情ですが、特にエネルギーの少ない子供達まで救い上げるという支援の方法について、私の個人の見解ですが、非常に素敵な支援体制の学校だと思いました。

### ③今年度の「けやき共育」取組状況

【谷藤委員】

資料③—1 のペアレント・トレーニングに関してですが、取組の趣旨を理解して参加出来る方が増えていくと良いのではないかと考えています。私も学校から保護者としてペアレント・トレーニングのチラシを配布されました。周りの人に聞くと何のチラシか分からないというような声もあり、もし本当に必要としている保護者がいたとしても自分事として捉えきれてないのではないかと。支援が必要な方にピンポイントで勧めたり、もしくは全体の周知を徹底したりするなど、支援に繋がりがやすい心理的ハードルを下げるような取り組みが今後は必要になると思われました。

【事務局回答】

分かりにくさというのはまったくその通りでございます。

来年度チラシを作成する際は検討してまいります。

支援が必要な方には焦点を当てて、健康福祉課と連携し、もうもう教室、療育教室の利用者や療育事業所の利用者の方々にはチラシ配布の際に事業を説明しながらお渡ししております。

今回は5名の方の参加でしたが、対象となる保護者の方にご参加いただいた実態です。しかしながら、チラシの内容が分かりづらいご指摘については、今後、興味を持ってもらい参加を促す内容として改善していきたいと思っております。

【東梅委員】

資料③—2 についてですが、様々な家庭状況、経済的に不安な面、親も子も相談出来る場所がなかったりだとか、大変苦しんできたと思います。その中でも大槌のけやきのチームが各部局の連携で問題を共有することによって、家庭に寄り添いながら支援を続けたことにより親御さんも前を向いて頑張ってみようというような気持ちになってきたことがとても良いことだと思います。

その中で、ふるさと科の農業体験を通じて、生徒さんのとても率直でとても素直な感想が手紙に現れています。これからもぜひふるさと科を続けていただきたいです。今後の見通しをお聞かせください。

【事務局回答】

「けやき共育」や体験学習、保護者会など参加した方々や生徒さんからの希望が出ていることはすごく嬉しいと思っております。

回数を重ねることで生徒同士で誘い合うということも始まり、ここから生まれる関係性や支援の入りやすさをすごく実感しました。今後も継続し、回数を増やしていきたいと思っております。

ちなみに、2学期の体験学習は教育長が講師でピザを焼いてみんなで食べるというようなところを考えています。

資源が少ない大槌ですが、少しでも出来ることを活かしながら実施していきたいと思います。

学校だけではなく、ぜひ地域の方々にも「これだったら自分も出来るかも」ということを教えていただき、一緒に取り組んでいきたいと考えています。

#### ④児童・生徒の状況

#### ⑤3月までの推進計画(来年度構想含む)

##### 【芳賀委員】

アンケートをとっていつも報告の時には色々な意見が出てきますが、統計的な部分が多く8割9割っていうところで終わっている。この問題はひとりずつの子供さんの問題でもあるので、私が一番気になるのは、「項目 4 の誰に相談することが多いですか？」1割の子供達がいないと回答している。では、この子供達がなぜいないと答えているのか、相談したくないのか、したいと思っていても相手がいらないのか、回答理由がぜんぜん違うと思うんです。そこまで分析をする必要があるのではと思います。ひとりひとりスクールソーシャルワーカーが行っている不登校へのアプローチであるなど色々なパターンがあると思うんです。すでに実施しているとは思いますが、今の大槌町の問題をこれだけ狭い地域で不登校の数が年々増えている。一時的に、現9年生十何人この子供たちが卒業した時に一時的に減るようには見えるが、実際は減ってないんですね。高校進学してきちんとコミュニケーションがとれる。我々が目指す子供、大人像に近づけているのかはやはり訓練の仕方だと思うし。無理強いはずっとダメなんだけど、その個別にあった支援をしていかないとどんどん崩れて行ってしまう。予備軍っていわゆる子供、たくさんいるんです。そういう子供の居場所をまず見つけてあげる、提案してあげる、そこが最終的に学校であるべきだと私は思う。しかし、不登校の子供たちが学校を居場所にできないのは事実であり、学校以外の居場所も必要ではないかと思います。

ORAIやこの2月に出来る第三の居場所が子どもたちの居場所になればいいと思っています。幼稚園児、高齢者、全世代が子供達の成長をみんなで見守り、その子に合った支援をしながら最終的な目標やっばり学校に戻すことを忘れないで欲しいかなと思うんです。

学校が全てではないという言い方もあるけど、やはり学校というのは何のための義務教育なんだということを考えた場合、先生の質にもよるけれども、やはり学校で学ぶべきことは、勉強だけではないので、コミュニケーション能力などを学べる場所だと思うんです。そういうところを考えながらアンケートを有効活用して欲しい。少数回答に目を向け支援して欲しいと思います。

##### 【事務局回答】

ご指摘の通り、ポジティブな回答をした子供達だけでなく、やはり全体的、統轄的な結果が見受けられますが、やはりネガティブな回答としてその一部であってもそのような子供達はどのような状況なのかを把握する必要があることを感じました。アンケート結果を両学園に持っていきながらぜひ学園の先生方と連携して支援が出来るよう働き掛けを行っていきたくと思います。ありがとうございます。

少数の子供達をいかに見るかっていうすごく私も大事だなと思っていて、今、担任やってる中で見てれば気付くんですね。子供の変容とかちょっとおかしいなというところに。

そこで、やっぱり感覚っていうのを我々すごく大事にやらなければならないなと思っております。そして、すぐ声を掛ける、「どうしたの？」っていうところがすごく大事かなと思っています。また、なるべくスクールソーシャルワーカーやスクールカウンセラーとかひとりひとり面談して、丁寧にやっていること

を継続していかなければと思います。これはやはり大槌学園でも、学年によっては全員やったりとか、何か心配事があったらば、その学年みんなの面談をしたりとかそういうこともやっておりますので、そこは先生方より勉強していきたいなと思っています。

芳賀委員がおっしゃった学校が居場所であるべき、これは私も本当に同感です。

教員として、そこが一番大事なところだと思っているので、12月に「みんなの学校」の映画を観てもらいます。そして、木村先生のお話を聞いて頂きます。これには教育委員会側の大きなメッセージでありまして、先生方にも町民のみなさんにも「やっぱり学校は楽しい所になる、居場所になる」という所にしていきたいという強い思いを込めているいます。これらを通して先生方にもこれから働きかけていきたいなと思っています。

#### 【教育長】

今の芳賀委員の人数少ないところだけでもっていう大事なことだと私も思います。

今見ていて思ったのは、とりあえずいないって答えている子、割合後期の方が多いのね。

自分なりの考えを持ち始めてきた時に、言えないのか、本当に親身になってくれる人がいないのかっていうところもあるので、そこら辺もう少ししっかりと把握する必要があるだろうなど。これを考えないと次の手が打てないので、これが出ずに「じゃ次どうする？なんでだ？」っていうところを我々は常に考えていかなければいけないのではと思っていて、良い視点を頂いたなと思っています。ただ、子供達が体験学習で色々な経験をしてそこで学んでいくという、ここでたまたま私がやることになりましたけども、もっと実はメニューを増やせれば、子供が望んだもの、こちらから押し付ければ二の足を踏む子もいると思うので、こういうのを次やってみたいと言った時に対応出来るような状況を作っていく必要があるのではないかなど。

今後は、地域の皆さんやふるさと科のコーディネーターと相談しながら構築していければと思っています。

現役の高校生、実際に不登校だった子供達が高校に行った後、体験後、今の義務教育課程を終わった保護者に話を聞くっていう機会があって非常にそれで勇気をもらったっていう子供達もいるようです。それは保護者もですが、いい取り組みだなあとと思うので続けて行ければと思っています。

話をした子供達も私が学園長の時に学園にいた子供達で、非常に手のかかった子供という言い方は変ですが、ともに苦労した子供達です。そういった子供達なのでその体験を聞かせてあげることでも、気持ちも軽くなれば良いなと思っています。休んでいる子供達は自分に負い目を感じることがあり、悩んでいます。いやそうじゃなくてそれは生きる、生きていく中でちょっとしたいろんな道があってそれを体験しているだけだというような、考え方を変えることが出来るとヒントに繋げていければこれも意味があるのかなあというふうに思っています。

今年始めたばかりのところでも成果というのを具体的に出せばいいのですが、いずれ続けていき、ひとりでも多くの子供達、不登校気味の子供達だけではなくて普通に登校している子供達の悩みがあれば、対応出来るような取り組みにしていきたいと思っています。

ICT を使って相談活動をやっていると思うんですけども、だいたいどれくらい例えば相談件数があるのか数字とか具体的にわかりますか？

#### 【事務局回答】

実を申し上げますと、まだ周知の段階です。

学校の先生の授業を使って周知をしている最中で、どうしてもちょっと時間が掛かったりというのがありますが、実際は小学生から1件の相談がきて、そのやり取りをしたってという例はあります。

今、**学校ロイロノート**というプログラムから「けやき相談チームに相談したいです」というメールを送るようなシステムを今年始めましたのでこれもちょっと修正しながら進めていきたいというふうに思っています。

【町長】

今後3月までの推進計画ということで、12月は「みんなの学校」上映会を関係者に案内して下さい。私の日程も調整をお願いします。

1月の木村先生の講演も参加したいと思います。関係課長も含めて案内して下さい。それでは、オブザーバーである菊池副町長、感想も含めて、これからの決意も含めて。

【副町長】

今回この特別支援というものが、地域の皆さんの力を借りながら家庭の問題、地域の問題を全部取り組むって姿勢がやはり大事ななというようにつくづく実感し理解いたしましたので、行政として何が出来るかっていう部分を包括的な形で考えていく必要があると学ばせて頂きました。

今回の会に参加させていただきながら町として出来ることは何かを考えてまいりますのでよろしくお願いたします。

【町長】

それでは、有識者の皆さんから何か今までの説明やら質問を受けた中で、ご質問等ご意見があればお伺いしたいと思います。

【佐藤先生】

まず、質問、普段割とコミュニケーションをとってやっているんで質問としてではないんですけど1個だけ、最初の資料の「モニタリング環境整備」不登校状態・不登校傾向の児童生徒の支援状況をモニタリングするとは、どのような状態になっているのか。

計画を進めているっていう今はおそらく単純に、その辺についてはどうする予定なのかっていうのを聞いてもよろしいでしょうか。

【事務局回答】

直近で、現在運用しているのは資料①の補助資料になるのですが、こちらの30日以上の子童生徒とそこまで至らない日数になる子童生徒という形で、2つの項目に分けて生徒さんの報告をいただいています。今現在では、各学園の先生方の判断によって報告いただいております、実際に2番という形で気になる子童生徒という項目を設けていますが、そこを経ずにいきなり年度途中で30日欠席だという報告がある子童生徒がいるのも現状です。

こちらとしても、すべての子童生徒の状況を把握出来てない現状もあり、学園の先生方はもちろんですが、ソーシャルワーカーやスクールカウンセラー等から情報交換会等で未然に情報を把握して早期のところでリストアップして支援が出来るような対策を構築していく必要があると思っております。

あとは、ここにはないのですが、先程の長欠子童生徒のところ、小学生の人数がかなり増えているという状況がみられていますが、ざっとみた印象ですが、兄弟姉妹が不登校傾向の同一家庭での長欠子童生徒がみられていますので、そういったところも未然の情報を基にして**事前に動く**という事は可能であるなというふうに感じているところです。

【瀬川氏】

いくつか基本的なところを質問させていただきたいと思います。

研修等行われていた支援員のみなさんは、どんな人がどんな役割を持って、どこに配置されているのか確認をさせてもらえるとありがたいです。

【事務局回答】

特別教育支援員、通常学級の支援員を配置しております。

特別支援員が3名～5名、大槌学園に5名、そして吉里吉里学園小学部に1名ということで配置しております。会計年度職員でございます。

基本は、各学校のほうで低学年を中心に学級のほうに配置されて、先生方、担任の先生の補助という形で特に支援が必要な子供達に関わってやっていただいている状況ではありますが、ただ、なかなか打合せをする時間がないということで本当にその場で支援員の方が判断して動くというような実態です。

【瀬川氏】

詳細にありがとうございます。もういくつか聞いてもいいでしょうか？

ちょっとまた別のところなんですけど、けやき相談チームの皆さんの動きの中で、高校生の在籍変更があったらそれを把握して支援に介入していくお話がありましたが、高校生の在籍変更はどのような形で把握されていくものなのか、例えば大槌高校以外の高校に在籍している子もきつというんだろうなど思った時に、どのような形で把握していくのでしょうか？

【事務局回答】

今年度中に行ったのは、私と関係機関の関係者、実務者で、大槌近辺の宮古、釜石の各高校に訪問して、こういうような事業をやっていますということで周知を行いました。今のところ検証的には、近辺の高校でしか出来ておりませんが、これをもう少し展開すれば県内であったりとか他県に通学している高校生にも支援が出来るような、戻って来た時の受け皿が少しでも出来ればと思っております。

【瀬川氏】

ありがとうございます。よくわかりました。

【町長】

それでは、質問から今度は助言という形で進めたいと思います。

今の質問を受けて全体的なご助言をいただければと思います。

【佐藤先生】

助言というか僕も一緒にやっていかなければなというところも含めてですが、不登校の子供達の支援を考えた時に、不登校になってしまったためどうするかという視点と不登校をどうやって予防していくかっていうこの2つの視点があると思います。

なってしまったからどうするかという色んな過程に繋がっているいろんなことをやっている。これをそのまま続けていくが本当にベストだし、指導教室を作るというもうひとつの居場所を作るっていうこの2つがそのまま今やっている流れでいいのかっていうのを思っていて、僕も出来るだけ協力していけたらなと思ってます。

もうひとつやはり予防という観点で、どういう人がハイリスクになっていくのかユニバーサルになったのかっていう状況を聞き取りして、そもそも学校の先生たちの全体的な指導を考えるというのもこ

れもひとつありますし、第2層、第3層が誰がハイリスクなのかっていう不登校のハイリスクになりやすい人達は誰なのかっていうのを考えた時に、僕が今学校に行っていて感じるところは、ひとつは指導主事が言っていました、大槌の兄弟不登校の6割くらいを診させてもらっていて、5割くらいは兄弟不登校になっている状況です。不登校になっている過程でその後、兄弟は入学時点でかなりハイリスクとしてフォローしていくのが良いのではないかなというのがひとつ感じているところです。

もうひとつは、今やっている幼稚園、保育園からの繋ぎで特別配慮を要する子達、もう学校で教室に居られないとなった状態、これはもう今の文科省の不登校の定義にはなっていないですけど、やはり教室に入って授業を受けられない状態というのは、不登校に近い状態なので、ここへの配慮というのもひとつすごく重要なところかなという、この2つはパッとみた時にわかる不登校のハイリスクかなというふうに思っています。

ただもうひとつ、このあと2年間でやらなければならないと思うのは、今、特別支援のおそらく1年生、2年生低学年ほとんど男の子、9割くらいが学園の男の子と思うんですけど、実際不登校になっている人の内訳みると半分以上女の子だと思います。男の子は症状が目立ちやすいので、小さい男の子が支援対象に上がってきてるんですけど、今行っている2つでも見つからない子達がおそらくいて、それが思春期くらいになった時不登校になり始めるという状況になると思うので、この思春期前半小3、小4ぐらいの思春期その前の小3、小4ぐらいでどうやって不登校になってしまうのか、その子がどういう子なのかっていうのをしっかり見つけて支援するというのがこの2つだったらすぐ見つかるころ、もうひとつは、どうやっていくのかなというのを一緒にやっていきたいなというふうに思っています。

モニタリングのところを質問させてもらったんですが、何をモニタリングするかっていうところはやはり特別支援の要支援委員会で開かれた子達をぜひモニタリングの対象にしたほうがいいのかと思いますし、プラス不登校、去年不登校の子達の兄弟というところが一番支援から漏れやすく一番我慢していて、いい子いい子でやって、そうですね、そういう子もいれば、最初すでにお兄ちゃんが不登校で1年生に上がった時にもう最初から行かなくてもいいもんだみたいな感じになってるから、特に1、2年生が多いですね、1、2年生がお兄ちゃん不登校の時に最初から不登校になっていくことがすごく多いけど、これをやはり絶たなければならぬしというところかな、あとは、全体をみた時に、最近の中学3年生の子達が12人すごく多くて。もう確かに人数減るんですけど、全部みた時に小3、4、5年生くらいだと思んですけど、小3、4、5年生が。これは全国的に小学生のサポートがすごく増えていて、ただ、どういう子達なんだろうというのをしっかりみていかなければというふうに思っています。ただ、予防的な観点、ハイリスクになりそうな子をどんどん見つけるというところを一緒にやれたらいいなと思って考えていました。以上です。

【町長】

今の先生のご提言、ご助言なにか質問ありますか。特にないですか。

それでは、瀬川先生、よろしくお願ひします。

【瀬川氏】

まずは、評価と現状分析、関係をするところで少し話を聞きながらちょっと考えたところをお話出来ればと思います。

最初の資料の提案のところ、ひとつひとつの目標をどう達成のための施策、評価指数を対応させるというようなことを提案させていただいていました。



今回目標として、最上位目標だったりそれに紐づく上位目標それから今年度はこういうところまで目標にするということを皆さんしっかりと言葉にされていますので、ではその今年度の目標だったり上位目標とかかかっているようなことを実現するために、今回いろいろと皆さん検討されている施策ほどの目標を達成にすごく関連してくるのかなというその部分の整理をもう一步聞いてみたいなど話を聞きながら思っていました。

例えば、前回の総合教育会議の時の資料を見た時に、すべての子供達に適切な支援が出来るという目標に対して、まあそれをはかる指標として地域の不登校児童の発生数とか不登校児童生徒の出現率、それから不登校児童生徒の個別の支援が出来ているかっていうようなこういった項目を指標として設定されていたのかなと思います。

おそらくこの指標の設定までされているので、例えば新規の不登校児童生徒数、新しく不登校になってしまう子を減らすことに特に紐づいてくる施策っていうのが今回いろいろ検討された中でというのはどれか関係してくる。もちろん完全に1対1で対応してるっていうとかではなくて、いろんなものももちろん総合的に影響を与え合っってこういう世代に繋がっていくことはもちろん思っていますが、その中でも少しこの目標に対してはこの取り組みが多く関係してるよなっていうこの施策と指標が紐づくというところがさらに整理されると、この施策が本当に効果があったのかどうなのか PDCA を回していくことにとってはすごく意味があると思いますので、もしよろしければそこまで目標と取り組みを繋げて少し箇所かしていただければいいのかなというふうに感じております。

それから、もうちょっとだけこの指標のことをいうと、今回のアンケート第1回とられて中にはもうすでに目標とした数値よりも大きく良い状態に見えたものもあるのかなと思います。

ただ資料の1番最初の質問にあった、自分に良いところはあると思いますか？みたいなところについてはかなり肯定的な回答が多くて、もともと目標とされている数字をもうすでにある意味上回っているような状況なのかなと思います。

教育委員会様からの質問にもありましたが、もちろんこれで良いこと自体はすごくすばらしいことだと、日々の先生方、皆さんの関りが子供達にいい影響を与えているんだなというのを感じておりますが、たださらにこの回答の背景にあるのは、子供達のどういう状況がこの回答に影響を与えているんだろうとか、ただ学年毎にどういった差があるのかってこれから2回目とまた取っていくと思いますので、その変化がどのように起きているのかっていうところにまたさらに注目されていただけると良いのかなと思います。

もうひとつ最後にですね、今後の取り組みについてというところにお話を聞いたところですが、来年の学びの選択肢最後の資料で整理していただきました。

私もいくつかの自治体の皆さんとお話をして、さまざまな不登校支援の施策について政策としてどういうふう位置付けられているのかっていうお話をすることが多いんですけど、すごく大事なと思うのは、このいくつかの選択肢を用意した時に、この施策ではいったいどういうことを特にカバーしたいのか、ターゲットのイメージをどこまで明確に持っているのかっていうのがすごく重要なかなと思います。

例えば、今回のお話の中で、エネルギーの低い子供もこう支援していくような重要なのではないのかなとお話されてましたが、であればそういった子供達を特に支援していくのはこの最後の章でいうとどこにあたるのか、子供スクール、けやき教室、それから各学園内の別室ではどういった違いがあって、

特にどういう子供達をそこでサポートしていけるといいのかこもある程度明確になってくるとより良いのかなというふうに感じました。

だいたい上手くいってないケースとしては、お話ししてきた自治体さんの中にあっただけですけど、結構たくさん本当に居場所を用意されているんですけど、残念ながら全部定員割れしているってみたいなことってやっぱりあるんですね。それはせっかく用意しているけど、ターゲットが明確でなかったり、そこを支援の場所、周知する、繋げるところにどうしても課題がでることによって、せっかく用意したけどうまく使われてないという残念ながらそういうケース等ありました。

そこについてもうひとつ大事なのは、ターゲットとともに繋いでいく施策をどうするのかなあということだと思います。せっかく複数の支援策を用意されるのであれば、実際に子供や保護者に周知してその支援の場所に繋いでいく、ある意味コーディネーターといいますかコーディネーター機能というのがすごく大事なのかなと思います。そこはもしかしたら構図でいうと、SSWの皆さんに流れるのかなあと見ながら思っているんですけど、ぜひ施策を用意した先のそこにどういう子供達をどういうふうに繋げていくかコーディネーターの視点をぜひ持って進めていただけるとより効果が表れてくるのかなというふうに感じております。

【町長】

大変ありがとうございます。今の先生方のお話を聞いて、しっかりと次の会議の中には盛り込めるようにしっかりと皆で検討よろしくをお願いします。

それではこれまでの協議につきまして全体的に文科省筒井様ご助言等をいただければと思いますので宜しくお願い致します。

【文科省筒井様】

文部科学省初等中等教育企画課の筒井と申します。今日は、本当に貴重な機会を見させていただく機会をいただきましてありがとうございます。

まず、我々地方教育行政系の担当をしているんですけども、地方教育行政総合教育会議の活性化というメニューで、我々の事業を活用していただいて、このような素晴らしいことを進めていただいていることにすごいありがたいなというふうに思っております。本当にありがとうございます。

この上で、助言というかある種、国の動向的なところのシェアみたいな話になってきてしまうんですけども、この事業自体は、統合教育会議、地行法が改正されてこの制度が出てきてから約7年~8年くらい経つんですけど、あまりどういうふうに使われてきているのかっていうのが、我々文科省としても、そんなに今までケアしてこなかったところがあり、そういう意味で今回、地方教育行政の活性化の中のひとつの柱として、総合教育会議の活性化というところで、ただ本当に見させていただいて、問題意識としてまさにこの不登校対策だとかまさにそうだと思うんですけども、首長局の福祉部局であるとか教育委員会とか連携しないとなかなかこの課題は解決出来ない。課題とかどんどん近年増えてきていると思うんですけども、そういうとこのリーチという意味で本当にこういう場を共有して、普段から同じ庁舎でお仕事されていると思いますので、共有自体はされていると思うんですけど、こういうオフショールな場ですね、課題意識、有識者を招いてされているということは、本当全体の共有というか意識が渡っていくっていう意味で非常に効果的な場になっていくのかなというところを制度担当者として、改めて実感させていただいたなというふうに思っております。

また、不登校対策自体ですね、10月の問題行動調査の公表では、今回全部すべての不登校、全国

的にも数字がすべて過去最高というふうになってきて、その実際調査の直接担当ではないですけれども、児童生徒科といういじめ不登校対策の部門に一時期在籍していましたので、非常にそのつぶさに状況は見てきたんですけれども、文科省の中でもですね、この不登校対策というのを今後このセンセーショナルに数字だけがどんどん高くなっていっているの、これはどういうことなんだということで、メディアなどにも取り上げられたりですね、そういうところで、社会や親がそんなに行かせるところまでプッシュしないということが全体的にあって、いろんな要素がまさにコロナとかもあって、非常に飛躍的に伸びてきている状況で、どうしようかというところがその既存の政策、スクールソーシャルワーカーとかスクールカウンセラーとかいじめの不登校対策とかが、あって本当に南さんとかですね、話を聞かせていただいて相当フルコミットをしていらっしゃる。この取り組みをみると、まさに政策の中でもこういうふうに応用すれば、非常に効果的だなというふうなところを感じた一方でですね、なかなか我々も特に特別支援的なアプローチというところは、問題行動調査の結果でも、非常に無気力、不安とかなかなかよくわからないグレーゾーンみたいなのが増えてきている中で、既存のソーシャルワーカーとかスクールカウンセラーとかっていうところを増やすだけでは、なかなか対応が厳しいのではないかなってという認識は、結構局の中でも持っていて、その特別支援教育課と児童生徒課とかでは、今後どういうふうな政策を取っていくのかっていうところは、こゝ国の中でも議論し始めたというか、結構新しい領域だなというふうに思っていて、ですので、ここで、けやき共育でこういうことを全庁的に取り組まれているというところは、先進事例になってくるのではないかなと思いますし、我々も、そういう意味で中身の担当課ではない地方教育行政という横ぐしの制度担当課なんですけれども、児童生徒課であるとか、特別支援教育課とか、中身を考えているというような課にもこの取り組みをフィードバックをさせていただいて、ぜひこの来年の第3回には担当課も来てもらって、ぜひ見てもらおうと、本当にチャレンジというか、国でもなかなか定型的なこうしなさいという政策はなかなか打ててきていないところが、先生方とか瀬川先生とか外部の方々も入れて、我々も先進的にやられているというふうなところは、本当に注目すべき取り組みだなと思っていますので、またぜひ我々の方も学ばさせていただき、引き続きコミュニケーション取らせていただきたいなと思っております。

【町長】

どうもありがとうございます。総合教育会議については、従来からこの形で進めていました。

私自身以前は、教育委員会サイドでも結構長い間居たので違和感はありません。教育長ともそういう部分は、教育はやはり子供達という面もありますけど、そこに育ってきた人達の繋がりもあります。大事なことだと思いますので、生徒の状況が変わったのも十分承知しておりますし、その中ではやはり町長部局が財政権を持っていますし、その中では総務課長含めて財政課長や直接的には健康福祉課長も入りながら、課題をきちんと受け止めて、人を育てるという大事なところですので、大事にしていきたいなと思います。やはり、なかなか形の見えないところにお金を出すというのは大変ではありますが、でもやはり地域の方々、先生方も含めて、地域の方々も子育てに対して子供を育てることに対してすごい熱意を感じている町ですので、小さいからこそ出来るところがあるのではないかなと思います。ぜひ文科省関係者の皆様にも色々な形で見させていただいて、ご助言いただきながら町づくりの中に活かしていきたいと思っておりますので、ぜひ引き続きよろしくお願ひしたいと思ひます。

その他になりますか、事務局何かないですか。

ないようですので、議事を終了いたします。

